ルネサンスのパラッツォにおける古代ローマ店舗の開口形状の継承に関する考察

日本女子大学　片山伸也

１．はじめに

古代ローマ都市は高度に稠密化した消費拠点であり、都市組織としては極めて計画的に形成された。ローマングリッドに代表される都市構造の計画性はもちろんだが、ドムス型住宅であれインスラであれ、その投機的計画性は貴族階級による都市内の大規模土地所有に拠っていると考えられる。いわゆる中世的な町家型と言われる短冊状の土地区画は発生せず、貴族による街区単位の開発が行われた結果、商業価値の高い沿道の１階に店舗を配置し、住居部分はその奥もしくは上層階に設けられた。

消費拠点としてのローマ都市の沿道には計画的に店舗が配置されることになるが、その開口部の形状についてもある意味の定形があったと言える。古代ローマの外港都市オスティアの建築遺構に見られる店舗の開口形状は、その後の中世における町家型住居の１階部分に見られる店舗の開口へと引き継がれたと考えられるが[1]、その機能的合理性には疑問が残る。その一方で、盛期ルネサンスの建築家ドナート・ブラマンテの設計によるパラッツォ・カプリーニの立面には、１階部分の店舗開口の形状には明らかな古代ローマの影響（あるいは古代ローマからの引用）を見て取ることができる。古代ローマの店舗開口の形状が、中世から近世ルネサンスにかけて、都市建築の中で如何に継承されたのかを考えてみたい。

２．オスティア・アンティカにおける店舗開口部

オスティア・アンティカに残るインスラの地上１階部分の開口に着目すると、１階店舗*taberna*にアクセスするための広い開口と住居にアクセスするための狭い開口の２タイプがあり、後者には階段が直結していることも多い（写真１）。通りに面した１階部分は通常貸し店舗として利用され、上階は住居となるため、管理区分は明確に分けられている。中２階あるいは２階部分を利用する店舗があったとしても、その上層部へのアクセスは店舗内からに限定されたと思われる。したがって、通りに面した１階店舗の入口と２階住居へのアプローチは平面計画的には連続していない。

インスラの１階店舗の開口部の形状はおおよそ定型化している。建物の構造はコンクリートと煉瓦の混構造だが、敷居部分には大理石もしくはトラバーチンが用いられている。開口上部は扁平なアーチの下部に木製あるいは煉瓦の楣を入れることで矩形開口を実現している。オスティア・アンティカのテルモポリウムには店舗の様子が復元されているが、矩形の開口部の脇に大理石の売台 *banco* が設けられている（写真２）。売台は開口全

体を塞ぐことはなく、店内へのアクセスを確保すべく開口の一部を覆うにとどまっている。平面的に見ても、敷居部を避けて内側に設置されているため、開口を閉じるための建具は矩形開口全面を塞ぐための板状の引き戸のようなものであったと考えられる。オスティア・アンティカの店舗の開口の敷居に残された建具の溝からは、一本引きの引き戸が想像される。溝は一方の端で大きくえぐられており、そこから板戸を嵌め込み、溝に沿って流したと考えられる（写真３）。賃貸されていた店舗部分の営業形態が変化する可能性を考えれば、売台はいわば什器であり、その有無や形状にかかわらず建築としての開口部を閉じるためには、売台が敷居の内側に収まって開口部からは独立していることが合理的であったと言える。

３．中世住居における店舗の開口形状

３－１．ティポロジアから見た開口の可能性

テヴェレ川の堆積作用によって海岸線がオスティアの町から徐々に遠のき、更にはローマ帝国の衰退に伴ってローマの外港としてのその地位も失っていく中で、中世初期までに都市建築がどのように変化したかは定かではない。しかし、中世後期イタリア半島部の諸都市が11世紀以降、商業の復活とともに次第に発展の兆しを見せる中で、都市建築の中で街路空間に面した１階部分の多くはやはり倉庫や工房、店舗などの商業活動に供された。イタリアの都市分析手法として確立されたティポロジアの考え方によれば、１階店舗部分の開口の形状と住居部への直通開口および階段の位置と形状は、都市の高密化と密接な関係がある。原初的な単家族住居であれば、例え上層階があったとしても１階店舗部分の開口と住居への直通開口部を分ける必要はない。むしろ店舗部の開口で家人の出入り口を兼ねた方が、間口が狭いスキエラ型の住居形式にあっては有利に商業活動を展開することができるはずである（図１）。

店舗部の開口と住居部への開口が区別されるのは、都市の高密化が増し、一棟の建物に複数の世帯が居住するようになってからのことになる。投機目的で計画的に建設された古代ローマのインスラにおいては、上階住居部への開口部は階段と共に過不足無く計画されたはずだが、暫時的に高密化が進む中世都市では、スキエラ型住宅が支配的な初期段階には住居部への開口および階段の出現頻度は高くなり、店舗部の開口と一つおきに現れることになる。しかし、複数のスキエラ型住宅がリネア型住宅へと統合されると、階段を集約し、それにともなって上階住居部への開口部も減少することになる。後藤は『西洋住居史』[2] の中で、中世の町家型（スキエラ型）住宅の１階開口部が、単世帯住居で階段が店舗内にあっても店舗入口開口と上層階住居への入口を別に持っているのは、インスラから中世町屋型への過渡期的な現象であるとしている（図２）。しかし、ティポロジアの視点から考察すると古代ローマのインスラあるいはドムスから発展した

場合と、中世の基本住居から発達した場合とでは異なる展開をしたはずである。単世帯においては住居が多層になった場合でも入口を区別する必要はないため、１階の開口は店舗と住居併用の間口の広い開口となり、基本住居が複数世帯に対応して高層化していく中で店舗部分と住居部への入口開口は分離される。その後の高密化の中で階段の統合とともに、住居部専用の入口としての１階開口部の数は減少するはずである。一方で当初から間口が広いリネア型住宅として計画された建物については、古代ローマのインスラおよびドムスと同様の計画性を見ることができるだろう。

単世帯の基本住居を考えれば、店舗入口開口部を間口に大きく取り、居住部への入口と兼ねる方が商業的にも合理的である。したがって、ティポロジアの観点からは初期段階の単世帯住居の入口開口として２つに分離された開口は前提としない。売台と出入口が一体化した鉤型の開口は、間口が狭く低層の一世帯住居にこそふさわしく、高密化の過程で階段室が分離されたことを考えると、階段室は当初、木板などの簡易な構造によって区画され、上層階専用の出入口が設けられたと考えられる。つまり、ティポロジア的な解釈によれば、図２の時系列は②が①と③の過渡的姿なのではなく、むしろ③が①から②へという古代ローマの高密な市街地から中世初期の低密な市街地を経て再び都市が高密化していく中世後期の都市形成過程における過渡的姿と解釈することが妥当なように思われる[3]。中世の町屋型住居の１階開口部のあり方として、古代ローマ都市を起源とする都市と10世紀以降に発達したいわゆる中世都市を比較検証する必要があるが、中世初期の建築遺構の手がかりは少なく、実証は困難であろう。しかし、中世都市の形成過程において一般的であった間口の狭い町家型住宅は、古代ローマにおける一般的住居形式であったインスラとはまったく概念が異なる都市建築であり、むしろ都市が稠密化した中世後期から一般化するリネア型住宅あるいはルネサンス以降のパラッツォ建築の方が成立背景と空間構成からはインスラと近似した都市建築であったと言えるだろう。

３－２．絵画史料に見る開口形状

パリのテュルゴ・プラン（図３）および15世紀ローマのペッレグリーノ通りの街並み（図４）には、間口が狭い典型的な中世期の街区の様子として１階部分に鉤型開口のある町屋型住居が描かれている[4]。建築タイプからこれらの街区が中世後期に形成された庶民的なエリアであることは明らかだが、鉤型のこの開口形状が中世の早い段階から採用されていたのか、図が描かれた近世以降に成立したものかは不明である。しかし、このような街区の住宅の形式については、間口を統合するリネア型に進行することはあっても、その逆は考えられないので、おおよそ中世後期から変わっていないと考えてよい。特に、間口が極めて狭く開口が一つしか取られていない建物については、高層化が進んで尚、上層階の住居への専用の入口を

設けることができていないものと考えられる。陣内らの復元によるローマの中世住居にも、鉤型開口部を１階に持つ住宅を確認することができる（図５）[5]。この事例では店舗部と住居部の入口は区別されているが、階段室が独立していないため単世帯住居と見做すことができる。

これら中世の店舗入口開口の形状をよく見ると、矩形開口の一部を売台が塞ぐ鉤型の開口は古代ローマの遺構と同様だが、インスラの売台が開口部よりも内側に引きこまれて建築とは構造的に切り離されていたのに対して、中世の町屋の図では建築と一体的に描かれていることがわかる。１階部分の用途のバリエーションを考えると、建築の構造と売台を区別する方が合理的であるが、中世後期の都市部では店舗としての利用（すなわち売台の設置）は必須となっていた可能性もある。アルプス以北の都市の様子になるが、『ティル・オイレンシュピゲール』の16世紀の木版画による挿絵には、中世町屋の店舗開口の様子が描かれ、売台を介して店内と街路空間の間で取引をする様が表現されている[6]（図６）。

イタリア中部シエナの中世後期の都市の様子を描いたアンブロジオ・ロレンツェッティの壁画には、街路に面して様々なアクティビティが描かれている。建具の描写も省略されているため当時の店舗の建築的特徴が精緻に記録されているとは言えないが、鉤型の開口部はなく、売台と思われるものはむしろ建築から通り空間の側にはみ出しているように見える（図７）。1340年にシエナのパラッツォ・サンセドーニの建設に際して交わされた契約書のために描かれたファサードの図には扁平アーチによる間口の大きな開口部がアーケード状に連続する１階立面が表現されているが、鉤型の開口は描かれておらず、少なくとも中世都市シエナにおいては１階店舗の開口部の形状として鉤型の開口は意識されていなかったと言える（図８）。

中世期を通して、都市における街路に面した商業的アクティビティは、古代ローマ都市と同様に住宅建築の１階部分に店舗が連続することによって活発に行われていたことは明らかだが、開口部と売台の関係および出入口の関係については、中世来の街区に建築構造と売台が一体化した事例が多く確認できる一方で、同時代の図像史料は鉤型の開口が必ずしも定形とは言い切れないことを示している。

４．ルネサンス期のパラッツォにおける店舗の開口形状の意味

街路に面したパラッツォのファサードに意匠的関心が払われるようになるのは、主として14世紀以降のことである。中世後期を通して住宅建築の上層階は木製のバルコニーで覆われる傾向にあったが、１階部分は都市条例の規制によって野放図な増築を免れていたため、建築構造としての開口形状が露出していたはずである。15世紀以降もパラッツォの１階部分は店舗として賃貸されることが一般的であり、この点については古代ローマの

ドムスあるいはインスラと同様であった。 16世紀半ばのシエナのパラッツォ・トデスキーニ・ピッコローミニの建設に際しても、１階に店舗から賃貸収益を得ることは計画における最優先事項であった[7]。

それは、ルネサンス期のローマも同様であった。1377年にローマに戻った教皇庁は、教皇宮殿をヴァチカンに移し、教皇都市としてのローマの整備に着手する。高位聖職者のパラッツォには、商業的アクティビティを１階部分に導入しながら、同時に人文主義的な嗜好を通して新しいローマの景観を形成することが求められた。ブラマンテが設計したパラッツォ・カプリーニ[8]（1512年）は、スコッサカヴァッリ広場とアレッサンドリーナ通りにファサード向けて建っていたが、ブラマンテは建物の店舗が入る下層部に基壇的にルスティカ仕上げを採用し、オーダーをピアノ・ノビレにのみ用いることで、商業的アクティビティと高貴な住空間を区別している[9]。このパラッツォは現存しないが、図像史料に残されたそのファサードには１階店舗の開口として鉤型開口が描かれている[10]（図９）。ルネサンスのパラッツォの下層部分については１階店舗部とそれに対応した中２階からなり、上層部の居住部とは空間的に隔絶されていた。また、スパン毎に賃借りするテナントも異なったため、店舗の開口部と出入口を共有する他の空間はないことから、鉤型開口が連続するファサードは合理的と言える。その後、このブラマンテのパラッツォのデザイン言語を模倣したパラッツォがローマおよびイタリア半島各地に建てられるが（パッラーディオもその代表である）、直後（1515年）にローマのポンテ広場に近いバンキ通りにラファエッロのデザインで建設されたパラッツォ・アルベリーニのファサードにも、１階に鉤型開口が描かれている[11]（図10）。

F.ネヴォラは、商業活動を１階の賃貸部分に取り込むことが如何に重要であったかをその立地とファサードのデザインから説明しているが、パラッツォ・カプリーニのファサード図における鉤型開口の出現がとりわけ興味深いのは、その意匠的扱いが明らかだからである。前述のテュルゴ・プランにせよ、ペッレグリーノ通りの立面図にせよ、鉤型開口の向きはほぼ同一方向で統一されていた。しかし、パラッツォ・カプリーニのファサードに描かれた鉤型開口は、中央のパラッツォへの入口を挟んでシンメトリーになるように開口の向きが左右で反転しているのである。中世来（あるいは古代以来）の伝統的な店舗の開口部であるだけでなく、鉤型の形状がここでは意匠的な記号として使用されていると見做すことができる。ブラマンテが人文主義的な思想のもとでこのモチーフを古代ローマ的なものとして認識したのか、単に中世来の伝統的なモチーフの一つと認識したのかは定かではない[12]。しかし、その後のパラッツォ建築において、上述のパラッツォ・アルベリーニの例を除けば、鉤型開口が意匠的に描かれる例は稀であり、16世紀ローマにおける十字窓枠の普及[13]のようにローマの街路空間における教皇の権威の表象やルネサンス的な古典主義という明確

な意図はなかったと言えるだろう。

５．むすび

都市の街路に面した１階に店舗が入り活発な商業活動が営まれるのは、古代ローマから近世ルネサンスまで変わらないが、中世の町屋型住宅は投機的・計画的に建設された古代ローマのインスラあるいはルネサンスのパラッツォとは異なる。居住空間と店舗空間の関係が異なるため、店舗の開口部と居住部への出入口の関係が変化しているのである。しかし、矩形の店舗開口部の一部を売台が塞ぐ鉤型の開口形状は一部の中世の店舗開口に連綿と引き継がれていたことを図像史料が示している。ルネサンス期のパラッツォの１階部分にも賃貸の店舗が配置され、ブラマンテが設計したパラッツォ・カプリーニの１階店舗には鉤型の開口部が採用された。その明らかにアイコン化された開口部形状が中世の伝統の継承なのか、あるいは古代ローマからの引用なのかは、他のルネサンスのパラッツォのデザインおよび同時期に書かれた多くの建築論とともに検証する必要があるだろう。

写真１　via di Diana に面したインスラ（筆者撮影）

写真２　テルモポリウムの店舗開口と売台（筆者撮影）

写真３　店舗開口部の敷居（筆者撮影）

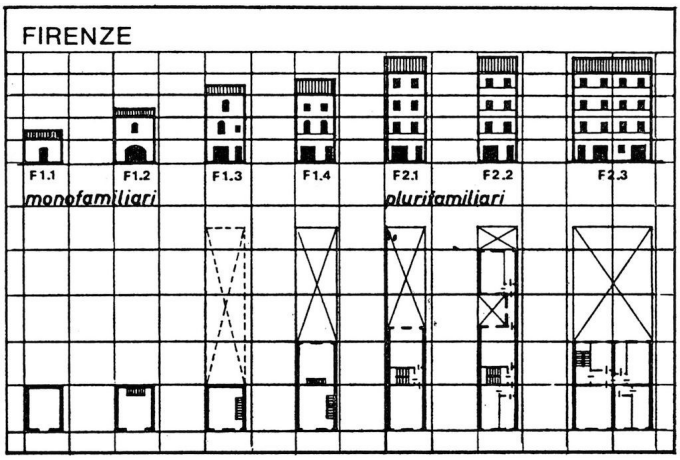


図１　フィレンツェにおける住宅類型（　G. Caniggia / G.L. Maffei, 1979, Tav.12 ）

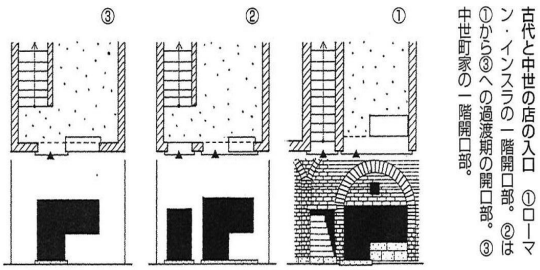
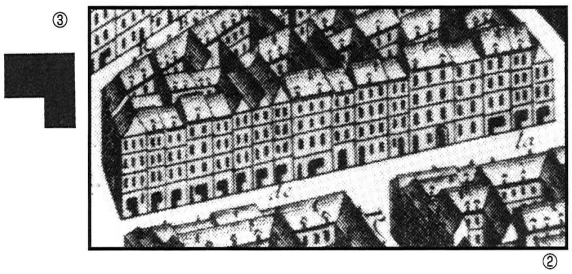


図２　古代と中世の店の入口　①ローマン・インスラの一階開口部。②は①から③への過渡期の開口部。③中世町家の一階開口部。（後藤久 ,2005, 図66 ）

①



③

②

図61 テュルゴ・プラン。一七三四年 ①近世を表すパリの地図として最も細密に描かれている。左上にパリの大聖堂が見える。②同拡大図、一階開口部が鉤形をしているのが分かる。③鉤形

図３　テュルゴ・プラン。①近世を表すパリの地図として最も細密に描かれている。左上にパリの大聖堂が見える。②同拡大図、一階開口部が鉤型をしているのが分かる。③鉤型
（後藤久 , 2005, 図61）

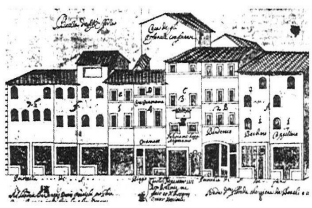


図67 ペルグリノ通りの街並み。ローマ 一五世紀

図４　ペッレグリーノ通りの街並み。ローマ、 15世紀（後藤久 , 2005, 図67）

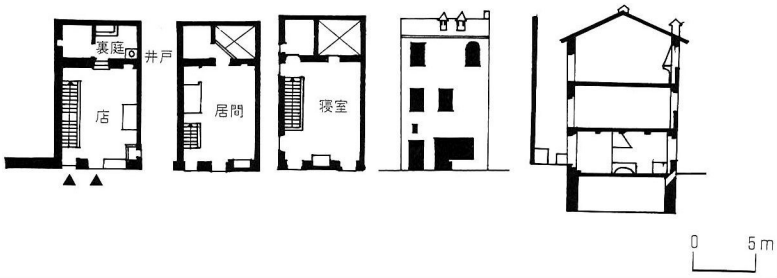
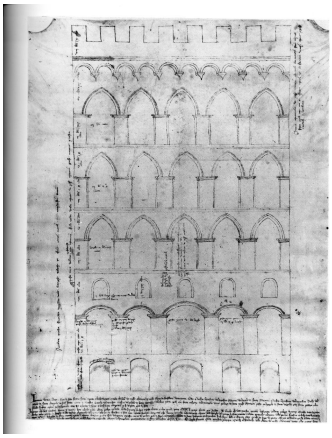


図５　店が付属する１家族，２室構成のスキエラ型住宅（陣内秀信 , 1988, p.153, 図６）

図６　『ティル・オイレンシュピゲール』に見る麝香を売る店（後藤久，2005，図65）

図７　A. ロレンツェッティ『善政の効果（部分）』（R. Starn, 1996）



40. Questo eccezionale disegno del 1339 documenta le forme originali del palazzo gotico della famiglia Sansedoni in Piazza del Campo e ci è pervenuto con il contratto di commissione da parte di maestri di Goro Sansedoni al maestro Agostino di Giovanni. L'antico Palazzo Sansedoni fu negli anni Sessanta del '700 incluso nella vasta ristrutturazione di più palazzi, attuata in un'elegante prospettiva neo-gotica, dalla quale risultò il complesso (sempre intitolato ai Sansedoni) edificato a destra della Fonte Gaia, guardando da Palazzo Pubblico. Il palazzo è oggi sede della Fondazione Monte dei Paschi di Siena. Sulla sua destra, di nuovo da un'ampia ristrutturazione neocinquecentesca del primo Settecento, risulta il grande complesso di Palazzo Chigi-Zondadari.

図８　パラッツォ・サンセドーニのための素描（F. Gabbrielli, 2009, Fig.203）

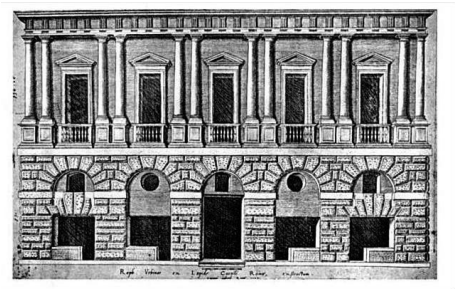


図 9　パラッツォ・カプリーニ（西洋建築史図集, p.54）

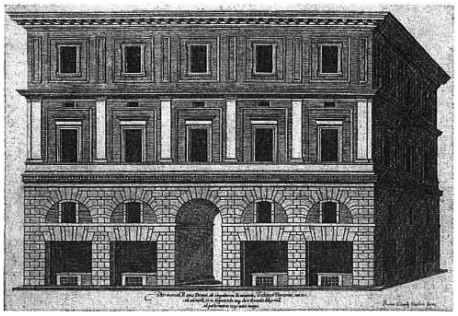


図 10　パラッツォ・アルベリーニ（ F. Nevola, 2011, Fig.14 ）

＜参考文献＞

後藤久，『西洋住居史　石の文化と木の文化』，彰国社，2005 年．

陣内秀信，『都市を読む＊イタリア』，法政大学出版局，1988 年．

Fabrizio NEVOLA, *Home Shopping —Urbanism, Commerce, and Palace Design in Renaissance Italy*, in "Journal of the Society of Architectural Historians" 70, no. 2, June 2011, pp. 153-173.

日本建築学会編，西洋建築史図集，彰国社，1987 年．

石川清，「十五世紀ローマのパラッツォ建築における十字型窓枠の導入について」，日本建築学会計画系論文集　第 471 号，1995 年 5 月，pp.175-183.

1　後藤久,『西洋住居史　石の文化と木の文化』, 彰国社, 2005 年, pp.142-152.
2　後藤久, 前掲書, pp.150-151.
3　ティポロジアは中世後期の人口増加による都市の高密化と拡大を前提としているが、中世初期には古代ローマ帝国崩壊後の人口減少と都市の縮小があり、後藤の説は古代ローマのインスラ遺構が中世初期において単世帯住居化した場合の開口のあり様と解釈することも可能である。
4　後藤久, 前掲書, pp.146-147, 151-152.
5　陣内秀信,『都市を読む＊イタリア』, 法政大学出版局, 1988 年, pp.152-154. ここでは階段室が区別されていない理由を裏庭に井戸があるための運搬路確保のためとしているが、開口部が2つに別れる理由の説明にはなっていない。
6　後藤久, 前掲書, p.149. ここで描かれているのは腰壁のある開口であり、売台と出入り口が一体となった鉤型開口ではない。
7　Fabrizio NEVOLA, *Home Shopping —Urbanism, Commerce, and Palace Design in Renaissance Italy*, in “Journal of the Society of Architectural Historians” 70, no. 2, June 2011, p. 155.
8 ヴィテルボの司教アドリアーノ・カプリーニのために建てられたものだが、後にラファエッロの邸宅となる。
9　F. Nevola, 前掲書, pp.160-162.
10 日本建築学会編, 西洋建築史図集, 彰国社, 1987 年, p.54.
11 F. Nevola, 前掲書, p.162.
12 ポンペイの発掘が始まるのが 1748 年、オスティアについては 1801 年になる。売台が設置された鉤型の店舗開口を古代ローマのモチーフと認識して引用していたとは考えられない。
13 石川清,「十五世紀ローマのパラッツォ建築における十字型窓枠の導入について」, 日本建築学会計画系論文集第 471 号, 1995 年 5 月, pp.175-183.